堕ちていく
白百合

溶けない愛蜜糖

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20330153

R-18, 守エク霊, エク霊, 18禁, エクボ, モ腐サイコ100, 腐向け, ♡喘ぎ, 霊幻受け

EntsCat様（user/11852202）とリレーエロ小説作りました！
やっほーい！！
ぜひ読んでいってくださいね！
エンツさんの所でもお読みいただけます！

そしてひよたまさん（user/39563383）からめっちゃ素敵なファンアートいただきましたぁぁ！（掲載許可済）
ありがとおおお！！

【堕ちていく白百合】とらのあなで通販中です！
文庫本/416P/R18
pixiv掲載本編＋溶けない愛蜜糖＋書下ろし３編収録
ご興味のある方は下記URLよりどうぞ！
https://ec.toranoana.jp/joshi_r/ec/item/040031175393

各種捏造設定含みます。
設定＞良家に嫁いだ元・霊とか相談所所長のあらたたさんが夫を突然死で亡くして未亡人に！
悲しみを克服して無事に結婚した二人のお話ですが！
今回はエクボと新隆の【初デート編】です！
エンツさんとKとで、それぞれ思い描く初デート（シチュエーション、時系列指定なし）を書きました。
楽しんでいただけると嬉しいです。

和装×生肌×仏壇×背徳感×大和撫子×兄嫁NTRの特盛大サービスのエロでございます。

登場人物
霊幻新隆＞良家の奥様。28歳。最愛の旦那を突然死で亡くし未亡人に。和装女装美人。良家の奥様らしく言葉遣いはお上品に。
九下部笑窪（エクボ）＞誠司の弟。35歳。道楽息子で兄と比較されて誠司に嫉妬している。霊幻を手籠にする係（えっ）
九下部誠司（モブキャラ）＞霊幻の最愛の旦那様。逝去済み。思い出程度に出てきます。

以下内容がふんだんに織り込まれておりますので、閲覧の際はご注意ください。
霊幻が奥様設定
霊幻が美丈夫（色気特盛）
霊幻が常に和装女装で浴衣も女物着てます（でも今回も男物も着てます）
♡喘ぎあります！
エクボが本家の次男坊で俺様だ！
エクボめっちゃ金持ち

上記ご参照の上、お読みくださりますと幸いです。

Table of Contents

溶けない愛蜜糖

※※※Kパート※※※

紆余曲折あった。本当に色々なことがあった。普通に生活していたらまず体験できないであろう事柄に、短期間で山ほど遭遇して命拾いをした。相談所を営んでいた頃も人間の常識から遠く外れた奇々怪界を相手にしてきたけれど、九下部家での体験は人間たちの人間たちによる人間たちのための常識外れな有象無象を相手にすることになり、ほとほと参ったものである。
新隆が嫁いでからほんの数年ではあるが、密度の濃い事があまりにも発生しすぎた。それこそ小説の世界での夢物語ではないかと思うほどに。元々庶民出身の新隆にとって安らぎなどないに等しく。
「うっ、はぁ・・・・・・」
光の加減でうっすらと浮かび上がる白百合の刺繍が施された着物。その裾を緩慢に払って、襖をたん、と閉めるや否や行儀悪く帯に手を差し込み、紫檀の座卓に手をついてゆっくりと畳に腰を下ろす。少々気合を入れて帯を締め上げてしまったのか、普段の着慣れていた締め付けよりも胸が苦しく、疲弊感が増す。
「よ、っこい・・・・・・あぁ、これ言い切ると駄目なやつ」
独りごちてため息をつき、座卓に突っ伏す。顔が映り込むほどに手入れをされ、磨き上げられた卓面に腕を組んで顔を埋める。そこに映り込んだ顔は、少々ぐったりとしている。
「おいおい、随分お行儀の悪いことで」
「あ、エクボ・・・・・・さん」
「申し訳程度に呼ぶなら、さん付けしなくていいぞ」
「じゃあ、エクボ」
「おう、なんだ」
二人のやりとりにはすでに距離感は無い。だが熟年と言うほどのものもなく、青く瑞々しい慈しみが感じられる。
新隆が襖を閉めた部屋は、エクボとの夫婦部屋になった一室だった。夕方に差し掛かった頃に自身の仕事を終えて、ひと段落ついた

といったところか。エクボは部屋に入っていく新隆を認め、後追いをしてきたのだった。
「仕事終わったのか？」
「あぁ、俺様のはお前のと違って事務仕事ばかりだからな。まぁ野暮用で少し出てきたがそんくらいだ」
その言葉を受けてのっそりと上半身を起こして見やれば、エクボは自身で言う通りスーツ姿だった。それはあの救出劇を繰り広げた時の、漆黒に艶めく上質な生地のスーツ。恐怖はあったが恋心を自覚し、ある意味結婚への進路を形作った立役者でもあり、思い出深いアイテムだ。それをエクボが改めて着用していることに新隆は静かに息を吐く。
「なんだ、さっきからため息ばっかついてよ」
「いや、疲れちゃって・・・・・・重だるいっていうか」
突っ伏しながらもごもご言うが、エクボには聞こえているのだろう。畳と足の擦れるわずかな衣擦れの音を立てて、すぐ隣に寄り添うように座り込んだのを感じる。そしてふわりと香る煙草と共に、肩にゆったりと腕を回される。その重みと体温が心地よく、新隆は少し身体を起こしてエクボにもたれた。
「大丈夫か？」
心配そうに囁かれる低音に耳を癒されて、新隆は静かに頷く。
「うん、身体は元気なんだ。気持ちがちょっときつくて」
ありがとうございます、と口先だけ動かして、そっと目を瞑る。
「そうか。まぁ色々あったからな。俺様でもお前なら疲れて家出の一つや二つしたくなるだろうなぁ」
言葉は優しく、だがいつの間にか着物を這う無骨な手は精神疲労に塗れた新隆の身体を弄るのに躍起なようだ。ひくりと反応する腕の中の最愛に、エクボは目を細める。
「あっ・・・・・・夕飯前だろ・・・・・・動けなくなる」
は、と小さく呼吸する新隆にエクボはやんわりと笑う。
「お前が作るわけじゃねぇだろ。なんなら今日は外で食うか？」
「そ、だな・・・・・・ぁ、ん」
駄目、と制する力の籠らない手を握って、口付けを落とす。その感触に小さく呻いてわずかに眉を顰めた新隆の顔は、欲情するのに時

間など関係ないと証明するかのような色気が香る。大人の爛れた時を味わう甘露を醸す男嫁は、今日もエクボを無自覚に誘うのだ。
厚めの絹の上から乳頭を淡く擽られ、到底それだけでは満足できない身体に育て上げられている新隆は、疲弊に身体を預けたまま、動けもせずに小さく戦慄く。
「だ、め、駄目、ぇ・・・・・・スイッチ、入っちゃ、ぅ」
ちょうど指がきゅうと摘んだ時に刺激が増したようで、びくりと仰け反って顎が上がる。白く照らされる喉を目掛けて軽く歯を立てると、いや、と弱々しく被りを振る。
「外に、行くんだろ？っ・・・・・・噛み跡だめ、ぇく、ぅ」
「今日はハイネック着ろ」
「んふぅっ」
鼻にかかる高い声を上げて、エクボの愛撫を甘んじて受ける。爛れた行為の残滓を残される苦い羞恥と、夜の外食への楽しみに募る甘い期待が擦り合わされて、背中に抗い難い痺れが走って震えた。
「っは、ぁあ」
無遠慮に裾の合わせから侵入してくる手を避けることもできず、襦袢を掻い潜って遊ぶ指がペニスを捕える。乳首を布越しとはいえ愛撫され、そこは期待に硬さを持って主張をし、エクボの指に刺激を受けて更に膨らみを増した。
「あ、エクボ、さん・・・・・・！」
「反応が早いな？疲れマラか」
「だっ！だからさっきから疲れてるんだってい、っ！」
きゅ、と先端に爪を立てられて言葉が詰まった。エクボの指摘は間違っていない。疲弊に抵抗力が奪われてされるがままだ。そのままくしくしと形を下着の上からなぞられて、新隆は堪えきれずに熱のこもった息を吐く。
「わかってるっつうの。だからさっさと出しちまえ。そんで少し寝てろ」
「やっ、ん、ぅ」
「夕飯までには時間がある」
お前がさっき言ったことだろ？と囁かれ、耳に舌を捩じ込まれる。ぴちゃりと生々しい音が脳内いっぱいに響いてぞくりと背筋が震え

た。かかる圧力も速さもそのままに、布地越しのもどかしい擽りについに先端から涎を垂らして濡れそぼる感触が生まれた。エクボはそれを即座に感知して、伸縮性の高い薄い布地のわきからするりと忍び入り、秘められた怒張を掌に直に収めてしまう。艶めく呻き声に相変わらず感度良好であることを認識して、本格的に愛撫を強めていく。エクボの身体に預けられた蜜色の髪が、重なる愛撫にサラサラと揺れてくすぐったい。
「あっ、あ、んっふ・・・・・・や、っ・・・・・・・えく、それ、でちゃ、あ」
はぁ、と息を荒げてとろりと目を細める新隆が、エクボを見つめて紅を引いた唇で訴える。自身に紅が移ることを厭わず、エクボは舌を這わせて唇にかぶりついて、その口内にねっとりと侵入していく。美しく揃った歯列から上顎をなぞって、そのまま奥へと犯していく。くちゅりと絡みつく音が響いて、同時に新隆が身体を強かに痙攣させた。
「ふっぅ、んっぅう！」
掌にどぷりと吐き出された温かな粘液の感触を覚えて、エクボはゆっくりと手を引いた。掌を返して見てみれば、受けた少し薄めのさらりとした白濁がそこにあり、うっすらと濡らしていた。肩で息をする新隆が目を瞑って、紅潮した頬を恥ずかしげにエクボのスーツの胸に埋めるのを見て、手を手拭きで拭ってからそっと髪を撫でた。
「あ、おれ・・・・・・イっちゃった・・・・・・えく、も」
「いい。お前は一旦寝ろ。ちゃんと起こしてやるから」
な？と念押しするようにぽん、と肩を軽く叩いてやると、それに安堵したようにそのまま新隆は寝息を立て始めた。寝入るのが早い。それほどまでに疲れていたのかもしれない。エクボは座布団を折って枕にし、新隆をそっと寝かせると、本人が苦しがっていた帯をそっと解いてくつろげた。そしてスマホを取り出す。
「あぁ、俺様だ。いや、こっちこそいつも・・・・・・今夜二名で。・・・・・・あ？あぁ、任せる」
早速夜の予約を馴染みの料亭に入れる。すっかり安堵して寝息を立てる新隆を見下ろして、エクボは愛しさに目を細めた。

新隆が起こされた時、喉の噛み跡がすっかり消えて無くなっていたので、新隆はハイネックを着用しなくても良くなった。寝入った時に着ていた着物を着替え、男性物の着物で着付けを行なって家を出て、今はすでに料亭だ。完全個室のプライベート空間からは、ぼんやりとライトアップされた日本庭園が暗闇に浮かび、食事とともに癒しを与えてくれる。
「はぁ・・・・・・やっぱりここの、美味いなぁ」
上品に炊かれた煮物や汁物、焼き物を摘んですっかりと満足げな様子を見せる新隆。仮眠をとって、ある程度疲労から回復して、お気に入りの味に満面の笑みを浮かべて舌鼓を打っている。
「お前、いちばんここの料理を気に入っているようだからな。覚えてたんだよ」
「そんな。連れて行ってくれたところはどこも美味かったよ」
エクボは日本酒の入った小振りのグラスを指先で揺らしてくつくつと笑う。
「そりゃぁどこも最高の店だからな。その中でも好みってもんがあるだろ。お前はこの店で見せた顔がいちばんよかったんだ」
「なっ、なんだよそれ・・・・・・バカ、じゃねぇの」
ほんのりと頬を染めて、場を取り繕うかのように煮物を口に含む。そんな素直じゃない様子が可愛らしいというのに、本人は無自覚だ。
「なぁ新隆」
「ん、何」
「今度、二人で出かけねぇか」
「っ」
思わず煮物を丸のまま飲み込んでしまい、激しく咽せる新隆が目尻に涙を滲ませる。エクボは思わず側に寄って背中を摩ってやる。
「お、おい大丈夫かよ」
「う、っ！げっほ！えっ、うう、ごめ、大丈夫」
呼吸を整えるために胸に手をやって、深呼吸を繰り返す。その様子を見てエクボはふと不安になった。馴れ初めこそ酷いものであったが、いまは結婚をして新婚旅行まで行き、それ以上に身体を重ねて

は愛を囁き合う間柄になったと自負している。しかしまだ新隆の中には何かモヤがあるのではないかとつい勘繰ってしまう。だが新隆は呼吸の落ち着きと共に顔を上げて、そんな不安を打ち払うかのように満面の笑みを浮かべて見せた。
「本当か？二人で遊びに行けるのか？」
「あ？おう・・・・・・お前が嫌じゃ、なければ」
「嫌じゃない！」
新隆がエクボの着物の胸をきゅっと摘んで、少し興奮気味に目を見開いている。その手を覆うように指を添えると、ふふ、と目を伏せて静かに微笑んだ。
「いやでもいま咽せて」
「びっくりして喉詰まらせちまったんだよ」
そう言って、見上げるようにエクボの顔を覗き込み、その大きな瞳をきらきらと潤ませる。
「嬉しかったから」
「──！」
「だって、それデートだろ」
くすくすと笑ってこてん、と首を傾げて顔を赤らめる新隆に、エクボは歯止めが効かなくなりそうな自分を叱咤して奥歯をギリギリと噛み締めた。さすがにこの料亭でおっ始めるには準備ができていない。なんとか欲を抑えるために思考を切り替えて、デートの内容に頭を全力で稼働させる。
「どこに行きたい？」
エクボがニヤリと笑って新隆を見る。
「新婚旅行はダーツだったからなぁ。今回はちゃんと希望を聞きたいところだ」
「いやもう新婚旅行レベルは腹一杯だからな？」
少し青くなって言う新隆だが、顔は楽しそうである。そして口元に指を当てる仕草をすると、思いついたように顔がぱっと明るくなった。
「だったらさ！俺行きたいところがあって」
そう言ってスマホを取り出すと、何やら検索して画面をエクボに見せてくる。

「俺ここに行きたい」
その場所は、誰もが知る日本屈指の超有名スポット。デートスポットならびに家族連れ、旅行先として候補に上がることが多い。
「ほお、ネズミィランド」
「そうそう、デートといったらここだよなぁってずっと思っててさぁ！・・・・・・だめ？」
新隆がしおらしげに上目遣いで見上げると、エクボが心得たというようにふっと笑う。新隆の前髪を指先で愛しげに撫でながら、酒の入ったグラスをゆったりと煽った。
「いいぜ。俺も興味があったからな」
「やった！あ、でもな」
新隆が少し目つきを険しくしてエクボを見据える。
「貸切はだめだからな」

料亭での食事と楽しいデート計画を終えて、帰宅してからもテーマパークデートについて話題は尽きることはない。新隆は自分の希望通りにリクエストを出せると分かり、当日の服装までエクボに指示をする。あくまで庶民としてのデートを楽しみたいのだ。家柄による事情も知りつつも、やはり自由度の高いデートを希望する新隆は、嬉々とした表情で言葉を弾ませる。なるべくSPの存在を感じずにいたいこと、金に任せての豪遊はせずに楽しむことが条件だった。
計画を立ててからは、新隆が主となって各種手配を行なった。それこそパークのチケット手配や、ホテルの予約などもだ。服装についても普段ならば外商や仕立て屋を呼ぶところを、新隆のエスコートでカジュアルウェア量販店に赴いて、試着を重ねながらコーディネートをする。最終的に、当日新隆は履き心地の良い膝下丈の綿パンにTシャツを合わせ、ボディバッグとスニーカー、頭には少し目深にキャップを被る。エクボはリネンシャツにパンツを組み合わせ、足元は店舗で気に入るものがないからと、普段カジュアル時に履いている革靴を着用する。パークに着いた二人は開園と同時にパークインを果たして、事前に候補に上げていた各種アトラクションの列に並んだり、予約をしたり、パスを取ったりと走り回った。

「エクボ！俺あのキャラと写真撮りたい！」
「あぁ？！おいちょっと待てやコラ！」
普段の九下部の家で見せていたあの淑やかな新隆像は消え失せ、まるで子供がはしゃぐかのように目を輝かせてあちこちを巡る。
ジェットコースターでキャップを飛ばされかけ、エクボに強請って買って貰ったキャラクターのカチューシャを嬉しそうに撫でまわし、ウォーターボートで巡るアトラクションのボート急降下に目をひん剥き、お化け屋敷の鏡で映り込むゴーストに笑い、シューティングアトラクションで点数を競い合った。プリンセスの物語を追体験するアトラクションでは王子とプリンセスの寄り添うシーンで密かに手を握り合って、テーマ曲に合わせて踊るライトや人形たちを微笑ましく眺めた。大音量で流れる音楽とキャラクターたちの台詞の合間に、新隆はボソリと嬉しそうに呟く。
「俺たち、みたい」
「・・・・・・」
その言葉だけはエクボの耳にやけにはっきりと届いて、柄にもなく赤面した。

広いパークの中を歩き回れば空腹にもなる。あちこちにあるポップコーンスタンドやチュロススタンド、各種ファストフードの店やレストランを巡り、新隆はスマホや店の入り口などに掲載されている限定メニューを確認してはエクボを呼ぶ。シーズン毎に展開される限定メニューを制覇するのだと意気込んでいた新隆は、満足げにドリンクやスイーツ、ピザなどをまるでリスのように頬張って幸福に頬を染めた。全てのメニューを一人で食べ切ることは難しいからと分け合うが、エクボには逆に新境地だったようで、パーク内で食すフードに驚きながらも楽しげに笑う。そんな様子のエクボを見て、新隆も目を細めて笑う。
あれやこれやと目標を達成する毎に時間は飛ぶように過ぎていって、あっという間に辺りは暮れていく。陽が落ちて闇に染まっていくパークは、街灯やアトラクション、壁の装飾などでキラキラと輝き始める。徐に腕時計を確認した新隆がエクボを引っ張ってパレードの場所取りをして、隣同士で共に眺める。電飾の大行列は闇にさ

んざめく無数の強烈な星の光のようで、お互いの瞳に記憶と共に焼き付けていく。色とりどりに輝く光に反射する瞳がキラキラと瞬いて、またお互いに、この煌めきに恋に落ちてしまいそうだった。

パレードを見届けて喧騒を抜ける。ダウンライトで照らされるプリンセスの噴水でしっとりと肩を寄せ合って、静かな空気の中で二人きりを楽しむ。光を受けてしぶきを上げる白い噴水の側で、二人はどちらからともなく近づいて、そっとキスをした。
「ここでさ」
「あ？」
唐突に言葉を紡ぐ新隆に、エクボが間の抜けた相槌を打つ。
「ここでキスをすると、ずっと仲睦まじく、二人で幸せに暮らせるんだって」
噴水の光のしぶきを眺めながら頬を染める最愛に、エクボはゆっくりと抱き寄せて、肩に静かに腕を回す。その手に新隆がそっと手を添える。エクボと新隆の左手薬指の指輪が、きらりと煌めいた。
「そうか」
感慨深げに低く返事をするエクボが、ぽん、と肩を優しく叩く。
「そんなまじないなんぞ信じる前に、俺たちはもうそういう仲じゃなかったか」
「あ・・・・・・」
「それとも」
うっすらと浮かび上がる白いうなじに指で触れると、擽ったそうに新隆が笑う。
「ふふっ」
「そう信じていたのは、俺だけか？」
「まさか・・・・・・ありがとう、エクボさん」
「あぁ」
水の跳ねる爽やかな音を背後にして、もう一度キスをする。軽く触れるような柔らかな口付けを交わして、満足げにそこを後にする。非日常の空間で浮き足立つままに任せ、ゆったりと景色を楽しむように歩いていく。
「そういやお前、ここで土産買うんだろ？時間は大丈夫なのか？」

「あぁ、そろそろ行こうかなって思ってたんだ。付き合ってくれ、王子様」
「仰せのままに、だな」
またお互いに顔を合わせて、くすくすと微笑み合う。あぁ、楽しい。

物販店に入ると暗闇に慣れた目を刺激され、また賑やかな店内に心が湧き立った。色とりどりの菓子やグッズ、ぬいぐるみや衣類が所狭しと並べられ、新隆は口元に手を当てて迷い始めた。
「なんだ？何が欲しいんだ」
「うーん」
エクボが問えば悩ましげなテノールを喉から絞り出す。一体何に迷っているのかと思えば。
「ベッドに飾るぬいぐるみが欲しいんだ。なんかこう、でかいやつ」
「でかい？」
「そう。抱きつけるようなのが欲しくて」
「俺じゃだめなのか」
割と真面目に言ったつもりだが、新隆は真っ赤に赤面して慌てて抗議してきた。
「ば！ばっか、お前に抱きつくと別の抱くになるから！」
「お前何想像してんだよ」
「！」
「どすけべ」
「エクボのばかぁ！」
半泣きになりながらも、しっかりと土産を選ぶ新隆。彼がエクボに差し出してきたのは、パークオリジナルの大ぶりの狐と狸のぬいぐるみだった。つぶらで純粋な瞳で、じっと可愛らしく見つめてくる。
「それ買ってきてください！」
「へいへい」
くすくすと笑いながらエクボがカゴを受け取って、レジに向かう。その背中を見送りながら、新隆は恥ずかしげに俯いた。

目的を全て達成できた二人は退園後、予約していたホテルで遅めの夕食をとった。ホテル内のレストランで上質なフレンチを嗜み、漸く部屋に戻った時には新隆は眠気に囚われて、ベッドに腰掛けたまま船を漕ぐ。それもそうだ。三十路にも差し掛かろうとしている成人が、丸一日かけて決して狭くないパーク内を休む間もなく走り回ったのだ。それにプラスして非日常的な興奮もあいまり、疲弊は相乗効果的に蓄積しているはずである。エクボも流石に疲労を感じて、足裏に少々痛みを感じるくらいには怠さを持っていた。
「エクボ、ごめんな。俺眠くって」
とろりとした半目でエクボを見やりながら、今にも寝落ちてしまいそうなほどに、ふらふらと上半身を怪しく揺らしている。
「なんで謝る」
「俺知ってんだからな。荷物にローションとゴムとバイブ入れてんの」
「なんだ、バレてたか」
「なんだじゃねーわ」
悪態を吐きつつも目はすでに閉じかかって、新隆は堪えきれずにぼすん、とベッドに横たわった。そのまま一息吐く間もなく、なんとも心地よさげな寝息をすうすうと立て始めたので、一部始終を見ていたエクボは呆気に取られて思わず笑ってしまった。
時間はすでに遅く、午前0時を回っていた。確かにこんな時刻では疲れて寝てしまうのも無理はない。なんせこの日の計画は全て新隆が立てたのだ。本人曰く「庶民のデートたるや」をエクボに示すために奮闘し、今日は午前5時から起き出して準備を始めていたのだ。
──ガキの遠足じゃあるまいしなぁ。
手元のスマホを繰って、撮り溜めた写真を振り返る。
どんだけ撮るんだと不満そうに溢すエクボを、無理やり画面に収めて一緒に決めポーズをしていたり。
移動の電車の中で窓の外を見やるエクボを新隆の目線から撮っていたり。
入場門の地面や生垣、空などを間違えて連写していたり。
敷地内に聳え立つ朝日に輝く城を背に、スタッフに頼んで二人で並

んで記念撮影もしたな。この写真は。
──手を、繋いでるな。
そういえばこの写真を撮影した後、新隆はキャップを更に目深に被って、あまり顔を合わせなかった。そうか、とエクボは納得した。
「ははは・・・・・・」
静かに笑いながら更に写真を繰る。
限定ドリンクのあまりの甘さに目玉を剥いて、何かを懸命に堪えている新隆。
（代わりに飲んでやることもできなくて頑張って飲んでたな）
ピザスタンドで買ったピザが熱すぎて、出来立てゆえのとろけるチーズで思いきり火傷をしている地獄の表情の新隆。
（猫舌とは聞いてたがこれほどとは思わなかった）
ソフトクリームを丸ごと地面に落として虚無の顔になっている新隆。
（新しいの買ってやったらすごく嬉しそうにして泣きべそかくんだもんな）
絶叫系アトラクションで本気で絶叫している顔の新隆。
（鼻水まで出すやついねぇだろ）
──こうしてみるとこいつ、結構不細工？
九下部の家では上質な和装で身を包み、本家の嫁としての居ずまいを決して崩さない。エクボにとっては実家でも、新隆にとっては嫁ぎ先。気に入られているとはいえ相当な緊張が続いていたはずだった。
表情の豊かさに終いには吹き出してしまう。だがこれが、新隆が生きていた世界で普段見せていた表情なのだとしたら。
「・・・・・・もっと、腹の底から笑えるようにしてやりてぇな」
彼が営んでいた相談所で、あの茂夫とかいう中学生や、結婚式に来ていた面子に見せていた表情がこれだったのなら、彼の素はそちらなのかもしれない、と考える。だからこのデートは成功だったのだろう。正直とても疲れたが、エクボも楽しかった。
これからは新隆が居ずまいを崩しやすいように環境作りをしよう、とエクボは静かに決意した。古臭い慣わしも程々にしなければ。

せっかく新隆が、自分の肉体を書き換えてまで嫁ぐ決意をしてくれたのだから。
スマホで映し出される最後の写真は、いつの間に撮られたのであろうか。二人の手が硬く握られた画像だった。
「くっくく！やりやがったなこいつ」
そう呟いてエクボがスマホを構えて、パシャリと撮影する。
真っ白なシーツにすっかり包まれて、幸せそうな寝顔を曝け出している新隆で、その写真の記録は更新された。

「おやすみ」

今日は抱くのをやめておいてやろう。
額にかかる柔らかな前髪を梳いて、口付けを落とした。

泊まりがけのテーマパークデートを終えて、また九下部の日常に戻った二人。
相も変わらず慣れた着付けでは、肉体の疲弊が増して呼吸も面倒になるほどで、少々緩めて着付けを終えなければいけないことに体重増加を危惧して、ダイエットを決意した新隆だった。だが同時に感じていたどうしようもないほどの倦怠感と眠気、いきなり覚えのない吐き気に精神を翻弄された新隆は、ある日突然手洗いから絶叫する。
「エクボ！」
その声は嬉々として屋敷内に響く。

「陽性が出た！」

※※※EntsCatパート※※※

「明日休みにしたから、外行くぞ」
結婚式を控えたある日のこと。
情事の後、いつものように湯を浴びた２人が気怠く浴衣を身に付け

ていたら、ボソっとエクボが言った。
「……？はあ」
「朝メシ食ったら車で出るから、準備しとけよ。……おやすみ」
エクボにひたいにいつも通りキスをされ、新隆はてぽてぽと足音を立てて自室に戻る。
（……いや、ちょっと待て）
ドライヤーで髪を乾かしながら、新隆ははっとした。
（これってデートなのでは！？！？）
忙しいエクボは、仕事以外で滅多に外に出ない。
そのエクボがわざわざ自分のために時間をとってくれたことに気がついて、新隆はふつふつと嬉しさが噴き上がってくる。
（うわ、うわ、何着て行こう……！）
慌ててテレビを付けて音量を下げ、明日の天気を確認する。
（明日は快晴……！じゃ、じゃあこの薄物にしようかな……いやこっちも捨てがたい……！）
あわあわと部屋に着物を広げる新隆は、エクボも同じようにはしゃいでいたとは、ついぞ思いもしなかった。

※

朝食を終えて、車庫に向かう。
「お、中々センスいいな」
新隆の着物を見たエクボが朗らかに笑った。
真夏の青空のような濃い青が、涼しげなグラデーションで足元に淡く落ちていく。裾には控えめに白雲が刺繍されていて、鮮やかだ。
派手目な長物を抑えるように、落ち着いた濃紺の羽織りを身につけている。
「エクボのも……似合ってる。落ち着いた感じだな」
同じくモノがいいエクボの着物をしげしげと新隆は眺める。
こっくりとした紺の長着に、しっとりとした黒の羽織。
「そう思うか？」
ニヤっと笑ったエクボの目線につられて足元を見ると、うっすらと蛙の刺繍がされていた。

「あっ」
「蛙は福帰るってな、縁起がいいんだよ。ま、たまには遊び心もねぇとな。……ほら、乗れ」
エクボのエスコートで新隆は黒いスープラのRZの助手席に乗り込む。
（あ……）
運転席に乗り込んだエクボが裾を広げると中に黒いスキニージーンズを履いていて、素足で来てしまった自分を新隆は、遊びづらいかもしれないとちょっと後悔した。
しばらく談笑しながらエクボが車を走らせると、前方に大きな丸太小屋風のログハウスが見えてくる。
「わ……！」
大人しく入り口付近でおすわりをして出迎える、シェパードとゴールデンレトリバーに新隆は目を輝かせた。
「着いたぜ」
大きなドッグカフェに車を停め、エクボは待ちきれない風の新隆を下ろしてやる。
「ジュンくんとハニーちゃんだって！お前らお利口だな〜」
ニコニコと笑う新隆が早速入り口の２匹を撫でていた。
「ちょっと待ってな」
エクボは受け付けに入って『予約の九下部だが』と手続きを進める。
「新隆、お前好きな犬種とかあるか？」
え、と新隆は突然の選べない質問に固まる。
「しばいぬ……？」
「そうか。だそうだ」
２人は半個室のテーブルに通され、犬用のおやつを手渡された。
「おおお……これは……！」
膝に乗り上げぺちゃぺちゃと犬用ちゅーるを食べる柴犬に新隆は目を輝かせる。
（心得てんなあ）
おやつを食べ終わった柴犬とシェパードは頭を２人の膝に置いてくつろぎはじめた。どうぞお撫でくださいという感じだ。

「お前いい子だな〜♡」
新隆は喜んで柴犬のポン太を撫で回している。エクボもシェパード
のジョンの頭をゆっくりと撫でた。
「ドッグランで一緒に遊ぶこともできますよ」
店員に言われて新隆は目を輝かせる。
「行ってこいよ。俺様はコーヒー飲んでるから」
手を振るエクボに頷いて、新隆は店員とポン太についていく。
窓から見える広い庭で新隆とポン太が遊び出したのを、エクボは目
を細めて微笑ましく見ていた。
が。
犬に飛び掛かられた新隆が笑い転げながら尻餅をついて、裾がはだ
けて白い足が曝け出されたのを見て、慌てて迎えに行った。

「そろそろ次に行くか」
ドッグカフェで『おにくたっぷり！わんわんランチ』とカフェオレ
を楽しんだ２人は、（特に新隆が）後ろ髪を引かれながらも、店を
後にする。
「お前が好きそうな所を調べておいた」
運転しながらそう言うエクボに新隆はじんわり嬉しくなる。

はたしてエクボが連れて行ったのは郊外型のパチンコ屋だった。

「……なんか、外してたらすまねぇ」
エクボの大学時代の友人が好きだった場所を必死に思い出した結果
なのだ。すまなそうにするエクボを見て、『誰がギャンブル狂
だ！！』と言いかけたのを新隆は飲み込んだ。
「ここはどうやって遊ぶんだ？カジノと一緒か？ジャンケット
は？」
エクボが何のことを言っているのか新隆には分からなかったが、お
そらく的外れであることだけは分かった。
「お客様、お困りですか？」
見かねた店員が声をかけてくれる。新隆はホッとした。
「すみません、初心者で」

「それではこちらへどうぞ。まずはこのICカードにチャージして、玉を貸りてください」
「カードでいいか？」
「もちろんです。こちらのカウンターへどうぞ。いくらチャージされますか？」
「んー、俺様と連れと、とりあえず１０万ずつで頼む。足りるか？」
ぶわ、とブラックカードを受け取った店員の手が震え、汗が吹き出す。
「じ、充分です」
（うーん、これヤクザか何かだと思われてんな）
新隆は頬を引き攣らせる。そもそも和服でうろちょろしてると、結構な確率で間違われるのだ。
「じゃあ、この筐体で遊ぶか」
エクボが水着の男女が出てくるパチンコ台の前に座ったので、その隣に新隆も座る。
エクボがハンドルを回してすぐ、数字が揃って台が光輝く。
それからも大当たりを連発し、だんだんつまらなそうにエクボは背を丸めはじめた。
「……何が面白いんだ、これ。ただハンドル回してるだけじゃねえか……」
「……」
一方の新隆はやればやるほど金を台に吸い込まれていって、ハンドルを回すのを止めてしまっていた。
（こうやって金持ちにはどんどん強運が寄って行って、貧乏人は金を吸い上げられていくんだな……）
新隆は遠い目をした。
「……なあエクボ、俺のおすすめの店に行かないか？」
「そうする」
エクボは慌てる店員に玉を運ばせて、全部ぬいぐるみやお菓子に変えてしまった。
「やるわ」
「はは……」

大きなクマを抱えて新隆はもう笑うしかない。
「「「「「ありがとうございました！またのお越しを！」」」」」
気がつくと店員がずらっと並んで見送りに来ていた。
エクボはちょっと頷いて、駐車場に向かった。

「ほお、ゲーセンか。一度だけ叔父に連れて来てもらったことあるわ」
「……お前ほどじゃないけど、俺も久しぶりだわ」
町外れの巨大店舗にやってきた。ゲーム会社直営店だ。
「両替していこうぜ」
またエクボが万札を突っ込んだので、慌てて新隆は店員からカップを受け取ってきた。
「……片っ端からやってみるか！」
音ゲー、格ゲー、シューティング、レースゲーム、と２人は存分に非日常を楽しむ。
「あれはなんだ？」
「あー、プリクラだな」
「プリクラ？」
「写真シール作る機械だよ」
エクボが興味を持った。
「丁度良いじゃねえか。記念写真撮っていこうぜ」
「あー、うん……」
微妙に違うんだけどな……と思いながら新隆は機体の中に入っていった。
いくつもポーズをとらされて、エクボも薄々気付いてきたらしい。
「なるほどこういうのか……」
唸るエクボに新隆はイタズラ心が沸いてくる。
シャッターがおりた瞬間に、ちゅっと頬に口付けた。
「ちゅープリ、って言ってな……んんんんっ！」
エクボが新隆を掻き抱いて唇を深く合わせる。
「ん……んんっ……ん、っ……」
ぎゅっとエクボにしがみついた瞬間に、シャッターがおりた。

「こんなのポルノじゃねえか！！」
「ははっ」
２人で落書きしながら新隆が赤面する。
プリクラをしまって、そろそろゲーセンを出ようかという時に、
UFOキャッチャーの前でエクボが立ち止まった。
「新隆だ」
「はあ？」
エクボは１匹の犬だかキツネだか分からないぬいぐるみを見て新隆の名を呼んだ。
「まだ小銭あったよな？ちょっと待っててくれ」
ＵＦＯキャッチャーに駆け寄るエクボを見送って、その闘いを新隆は見守る。
が、一向にぬいぐるみは落ちる気配は無かった。
「簡単そうに見えて難攻不落……くそっ、ますます新隆だっ」
ぶつぶつ言うエクボに新隆はため息をついた。
「ちょっと代わってくれ」
ささっと。
新隆はぬいぐるみを落とした。
「ほら」
「おお……！お前本当に器用貧乏だな……！」
「なあさっきから褒めてるふりしてけなしてねぇ？」
「んなことねぇよ」
ぬいぐるみを抱きしめてエクボは嬉しそうに笑う。
「ありがとな」
「……ん」

２人はエクボが予約したレストランに向かった……のだが。
「うっそだろお！？」
そこは閉店していた。
（アフリカ料理……すげえとこ選んだな……）
新隆は店先に残された看板をまじまじと眺める。
「だって電話で予約して……えええええ！？」
「……なあエクボ、近くに俺が昔行ったことあるラーメン屋がある

から、そこ行かねえ？」
う、とエクボは複雑そうな顔をした。
「そこは……兄貴と行ったのか？」
新隆は意表を突かれて目をぱちくりさせた。
「いや……行ったことない」
「ならいい。行こう」
仕方ない男だな、と新隆は苦笑した。

「なあ、新隆、楽しかったか？」
ラーメンを食べ終えてぽつりと聞いてくるエクボに新隆は微笑む。
「もちろん。……俺の好きそうなところ探してくれたんだろ？ありがとうございます」
「いや……その、これから、俺様が前から行ってみたかったところ、行っていいか？」
「もちろん！」

言って、新隆は後悔した。

過激な設備の揃ったラブホの前で、がっちりと新隆は腰を抱かれている。
「行ってみたかったんだよなぁ……新隆と」
ずるずると引きずられるように新隆はSMルームに吸い込まれていった。
「「おお〜」」
鮮やかな黒と赤で塗られた部屋にエクボと新隆は感心する。
「すっげえな、見たことないモンばっかりだ」
「そうだな……ごめんなさい、ちょっと、水を汲みに」
「新隆」
トイレに行こうとした新隆の手を掴んで、さっとエクボは大きな鳥籠の中に押し込む。かちゃん、と南京錠をかけた。
「エクボ！？」
「新隆、俺様、お前にコレに乗って欲しいんだが」
エクボは親指で三角木馬を指差す。

「はぁ！？ヤダヤダヤダヤダっ！！」
「そうかぁ……残念だな……」
エクボはニヤニヤと笑いながら、スマホで新隆を撮り始めた。
「……っ、エクボっ……」
「んん？」
足を擦り合わせて尿意に耐える新隆を、エクボは冷やかに支配者の目つきで見下ろす。
「お、お手洗いにっ……お手洗いに、行かせてくださいっ……」
すう、と冷たくエクボの目が細められた。
「かまわん。そこでやれ」
がしゃ、と鉄格子を掴んで、絶望に新隆は瞳を揺らした。
「そんなっ……！」
「お前は本当に──可愛いナァ」
ねっとりと落とされる声に、きゅ、と新隆は着物を握った。
「分かった──分かりましたよ。その三角木馬に乗るから、ここから出して……」
ほくそ笑んで鍵を開けたエクボを突き飛ばすように、新隆がトイレに駆け込んだ。
「ほんっともうさいてー！……準備してくるから、先シャワー浴びてて」
鞄に洗浄の道具を入れていた新隆に、またエクボは目を細めた。

「なんか自販機で三角木馬用のディルド買うみたいだな」
「……そう」
何故か風呂上がりにまたきっちり着物を身に付けたエクボが、うきうきと自販機のボタンを押す。
「お前も和服着ろよ。羽織も」
「？分かった」
新隆はバスローブを脱いで、素肌の上に長物と羽織を着た。
「えーっと、まずアルコールで消毒して、」
エクボが説明書を読みながら支度をしていく。
「ディルドにコンドーム被せて、設置する。で、お前がまたがる、と。パンツ脱いだか？」

「……」
しぶしぶ新隆はボクサーパンツを脱いで、三角木馬の腹にある突起に膝を乗せた。
「ソフトSMってことで、頂点は削って平らにしてあります……だとよ。良かったな、新隆？」
「でなきゃただの拷問だろうが！」
エクボは新隆の尻たぶを広げて、ディルドを後ろに飲み込ませた。
「……なんか細い？それに柔らかいな」
「そうなのか？」
余裕の表情だった新隆は、エクボが木馬のストッパーを外し、前後に揺らし出してぎくりとした。
「んっ……揺らす、と……どんどん、奥に、いく……っ」
「へえ」
エクボは楽しそうに、揺れに身悶え始めた新隆を眺めている。
「ぁ、あぁっ……ちょっ、まって……」
身体を浮かそうとした新隆の太ももが斜面に滑って登れず、さらにずんっとディルドを飲み込んでしまったのに、ひゅっと息を飲んだ。
そういう目的で、この形をしているのだ。
「ゃだああぁああっぁん♡♡♡たすけてエクボぉっ♡♡♡」
ビクビクと震えながら叫ぶ新隆にエクボはぎょっとする。
「大丈夫か！？」
慌ててエクボはストッパーを入れて、絶頂が近くなってくったりとした新隆の身体を抱き止め、持ち上げる。
「ん……♡」
ディルドが抜ける感覚に、新隆は身震いした。
「すごかった……気持ちいのから逃げられなくて……」
「はー、昔からある道具ってのはすげぇんだな……」
「……ちょっと刺激が強いわ……」
ピクピクと甘イキする新隆に肩を貸して、２人はベッドでしばし休む。
「……あれ何？」
あまり詳しくもないのにこういう部屋を選んだのは失敗したか、と

エクボが苦々しく思っていた時に、新隆が変わった形の椅子に興味を示した。分娩台を彷彿とさせる。
「ええと……ドリームラブチェアー？セックス補助椅子、だとよ」
「ぶっはwwなんだそれww」
元気が出てきた新隆が椅子に横たわった。
「こう？」
「そうそう。で、俺様がゴムつけてこっち、と」
向かい合って座ると股間が引っ付く構造に、２人はドキっとする。
「で、いい感じに椅子の高さ変えて、ピストンする、と。……挿れていいか？」
顔を赤らめて、こくんと新隆は頷いた。
「あ、あ……ッ」
戯れに挿入される昂りとはいえ、いつも通りのじぃんとした痺れを新隆にもたらす。
「うわ、すげえ楽だな、これ」
しっかりと新隆が固定されている上に、エクボが腰を動かすと支えている椅子がそれに合わせてスライドする。
「ぁ、あっ、はげし……ッ」
ずんずんといつもより早いスピードで穿たれて、新隆はぎゅっと肘おきを握りしめた。
「新隆っ……」
がっちょんがっちょんがっちょんがっちょん……
「……っぶっははははは！！駄目だぁっ、音が面白すぎて……！！がっちょんがっちょんって……っァ！♡♡♡♡」
「くくっ、笑うなよ！俺様もつられて……あははは！」
ゲラゲラ笑いながら２人ともびゅくびゅくと精を吐き出した。
「はー、おかしかった……」
「じゃあ次は磔台……は、やめとくか……」
「へ？なんで？」
「いやだってお前……似たような目に遭わされたばっかりだろ……」
ああ、と新隆は合点がいく。
「ベッドに拘束されたりとかは嫌だけど、ハリツケは別に……それ

よりあっちの謎のブランコの方がキッツいわ。大爆笑しながらイきそう」
新隆は手枷足枷がついたSMブランコを指差す。確かにこの流れでいくとそうだな、とエクボも頷いた。
「じゃあ手と足、ベルトで拘束すんぞ？」
「おー」
Ｘ字の磔台に、着物を身に付けたままの新隆の両手両足を拘束する。中々にフェティッシュな姿になった。
「……抵抗できないってのは、ちょっと怖いな」
「安心しろ、気持ち良くするだけだから」
それはそれで安心できないような、と新隆はひとりごちる。
エクボは新隆の胸元を開き、指先で弾くように触りはじめた。
「ぅ、んん……ッ」
ピクリと震える身体に満足そうに目を落として、エクボはベロリと舌で乳首を舐め出した。
「はぁああっん♡」
エクボは空いた手で新隆の陰茎を擦りはじめる。
「ん！んんっ……！」
ギチギチと手枷の皮が鳴った。
「えくぼっ、イくっ、イっちゃいますからぁ……ッ♡」
「なんだ？イっていいぞ」
後ろの寂しさを埋めて欲しい。
いつもは腰を足で引き寄せて新隆は意思表示していたが、今はそれができない。
こく、とツバで喉を潤して。
「えくぼが欲しい……ッ」
囁くように漏らした懇願に、エクボは意地の悪い笑顔を落とす。
「いいぜ？くれてやらぁ」
「あ……ッ！」
ずぶ、と突き上げられて、新隆は白い喉をさらす。
「うあっ、すごっ、すごいぃ……っ♡」
「きゅうきゅうしゃぶるなよ。嫁御殿はＭっ気が強いんだな？ぇえ？」

そう言われて、揺さぶられながら恨めしそうに新隆はエクボを睨む。
「いじわる……っ♡」
「っ、違いねぇ！」
ずん、とより深く新隆の中に喰い入る。
「あ———ッ♡♡♡♡」
「っう……！」
うっとりと２人は、麻痺するような快感の中に溺れて行った。

※

結局２人は屋敷に帰ってきてからも、エクボの部屋でたっぷりとお互いを貪ってしまった。
（——１０代のカップルかよ）
エクボの腕の中で目覚めた新隆は、ごそごそと起き出して襦袢を着る。
エクボが新隆用に置いている行李から、彼岸花の浴衣を取り出した。
ふ、とエクボの文机を見ると。

犬だかキツネだか分からないぬいぐるみが、場違いに大事そうに飾ってあって、新隆はなんだか恥ずかしく、嬉しくなってしまった。

終